

No.3024

「中央アジア出土東ローマ帝国貨幣の基礎的調査」

名古屋大学高等研究院

特任助教

村田 光司

本研究は中央アジアを対象に、(1) 未だ基礎的調査の行われていない現地での東ローマ(ビザンツ)帝国貨幣の出土状況を調査・整理し、(2) 前近代中央アジアの一地域における東ローマ貨幣の利用形態とその東西交渉史上の意義を明らかにすることである。東ローマ貨幣は内流通の枠を超え、時には国際的な決済の手段として、そして時には貨幣本来の機能を超えた工芸品や文化传播の媒体として、前近代世界における東西交渉の重要な史料としての価値を持っている。

2年計画である本研究の初年度(2019年度)は、中央アジアにおける東西交渉路の結節点であった現キルギス周辺域に焦点を絞って、未報告の東ローマ貨幣の調査を行った。キルギスではすでにソビエト連邦時代に数点のローマ・東ローマ貨幣の出土が報告されたが、具体的な出土コンテクスト、貨幣のタイプ・年代や銘文、さらには現在の所在が不明なものが多い。年度前半は現地報告書の悉皆調査による出土報告をリスト化したうえで、キルギス科学アカデミーに送付し、これらの所蔵先が判明するかどうか事前に問い合わせることとなった。事前調査の成果は7月15日に名古屋大学にて研究報告会を開いて発表した。9月27日から10月8日にかけてキルギスで現地調査を行った。現地では科学アカデミーのバキット・アマンバエヴァ部長をはじめ多数の方々のご協力を得て、既存報告分の何点かの所在、現状を確認できたほか、未報告のものも数点確認することができた。事前調査分と併せたこれら新出貨幣の分析と歴史的意義の解明が2年目における作業となる。その際、キルギスで出土した貨幣史料との比較検討のため、中央アジアの他国での史料状況を調査する予定である。

2019年度の成果は2月18日に研究会を開催して共有したほか、速報が雑誌論文の形で『Heritex』(名古屋大学人類文化遺産テキスト学研究センター)第3号(2020年)に掲載された。